

1 BMXフリースタイル「マイナビ JapanCup Yokosuka」の開催

市長

本日は、BMXフリースタイル マイナビ ジャパンカップ横須賀の開催について、主催者である一般社団法人全日本フリースタイルBMX連盟（以下、J F B F）出口理事長と共同で発表させていただきます。

先ほどもご覧いただきましたが、今年も、多くの素晴らしい選手達が横須賀に集い、熱い戦いが繰り広げられることとなりました。先月のパリ五輪での、中村輪夢（なかむら りむ）選手の活躍の記憶が、まだまだ新しい中での開催に、私自身、非常に興奮しております。

さて、今回、3回目となるBMXフリースタイルジャパンカップのスケジュールは、お手元の資料のとおりですが、今大会も昨年同様に、国際大会として開催されるため、オリンピック効果も相まって、これまで以上に盛り上がる大会になることは必定だと、大いに期待しています。出口理事長をはじめJ F B Fの皆様、そして大会に関わる多くの関係者の皆様には、今大会の開催に向け、大変多くのご尽力をいただきました。この場をお借りいたしまして、心からの感謝を申し上げます。

私は以前より、国際色豊かな横須賀こそ、BMXをはじめとしたアーバンスポーツとの親和性があり、地域の活性化とともに、横須賀の文化としてアーバンスポーツを根付かせたいと考えていました。そのため、皆様すでにご承知のとおり、一昨年には、J F B Fとアーバンスポーツを活用した連携協定を締結し、“アーバンスポーツのまち横須賀”として、様々な取り組みを、共に行ってきました。これまでの3年間は、BMXをはじめとしたアーバンスポーツを本市に根付かせるための種まきの期間と位置付け、BMX体験会や、小学校訪問の実施、さらには、学校訪問実施校の児童から7月に開催されたパリオリンピックのBMX日本選手団へ応援旗を贈るなど、横須賀市ならではの取り組みを行ってまいりました。現在では、市民の皆様にアーバンスポーツという文化が着実に浸透し、BMXを始める子供が増えるなど、新たな芽が出始めていることを実感しております。今後も、これらの芽を絶やすことなく、さらに大きな花を咲かせられるように、関係団体の皆様、地域や企業の皆様との連携を、一層深めてまいりたいと思っております。

また、今後の展望になりますが、アーバンスポーツには、デジタル技術の活用や音楽との融合も重要な要素と考えています。例えば、ドローンの映像を活用した大会観戦、メタバースを活用した仮想体験、AIによるパフォーマンス解析など、最先端技術を使った新しいスポーツの楽しみ方や、音楽を取り入れたフェスティバルのような大会開催など、スポーツ・最先端技術・音楽が一体となった展開も考えていきたいと思っております。

「アーバンスポーツのまち横須賀」への挑戦に、終わりはありません。アーバンスポーツを「する」「見る」「支える」環境の整備をどこよりも先んじて、その魅力を、精力的に内外に発信していきたいと思っております。

（一社）全日本フリースタイルBMX連盟 出口理事長

本日、このような場をお借りしてBMXフリースタイル マイナビ ジャパンカップの公式開催をお伝えできることを感謝しております。

私は、一般社団法人全日本フリースタイルBMX連盟の理事長を務めておりますが、ヘッドコーチとして、パリオリンピックに帯同し、中村輪夢（なかむら りむ）選手と一緒に戦ってきました。帰国が8月2日でしたので、まだ帰ってきたばかりと言ってもおかしくないのではないかと考えて

います。

パリオリンピックでは、東京オリンピックを経験したこともあり、メダルを確実に取れるという自信がありましたが、メダルに届かず5位入賞という結果でした。良い結果ではあるものの、私たちとしては凄く悔いが残る結果でした。中村選手とも一緒にたくさんの涙を流しました。次の目標としてロサンゼルスオリンピックを目指す、スイッチを切り替えていますので、ぜひ応援していただきたいと思います。

さて、今回のパリオリンピックでは、上地市長からもお話がありましたように、横須賀の子供たちからたくさんの応援旗をいただきました。応援旗を中村選手が受け取ったときに、どのような反応をするかと凄く楽しみにしていたところ、彼自身も凄く喜んでいて、「こんなにももらえるんですか!？」とビックリしていたのが印象的でした。皆様もご覧いただいていたかもしれませんが、パリオリンピックの会場で、中村選手は、応援旗を掲げて写真撮影しました。だいたい、5～6枚の写真を撮るとなると、写真を撮り終えた旗を横に置いて、次の写真を撮るであろうというところ、中村選手は、写真撮影を終えるたびに、応援旗を一枚一枚、綺麗にたたみ、「持っていていいですか？」と手渡ししていて、それを全ての応援旗で繰り返していました。今回いただいた応援旗は、中村選手にとって、それぐらい大きな力となっており、ライディングのすべてに力を与えたものだと思っております。横須賀の地で開催されるジャパンカップにも、中村選手はエントリーしています。恩返しのために来るということもあると思いますので、横須賀という街で、素晴らしいパフォーマンス、ぜひカッコいいスタイルを魅せてくれたらなと思っています。

今回のジャパンカップの前には、Xゲームズが開催されますが、パリオリンピック後のUCI（国際自転車競技連合）に直結する公式戦の大会は、このジャパンカップ横須賀が初となります。その中で、中村選手がどのような成績を収めるのか楽しみですし、他の選手もとても成長しているので凄く期待しています。ジャパンカップに関しては、今回もUCIのカレンダーに登録し、C1国際大会となっており、大会としても成長していると思っています。今回は200人を超えるライダーのエントリーがあります。

また、つい先日、月曜日と火曜日に学校訪問に行ってきた印象的だったのは、「BMXって知ってる？」と、子供たちに聞くと、横須賀大会が始まった頃の2、3年前は5、6人しか手が挙がりませんでした。しかし、今回の学校訪問では、ほぼ全員の生徒が手を挙げていて、ジャパンカップのことを知っている子もたくさんいました。それくらい、横須賀でのジャパンカップは、知名度があり地域に根付いてきていると感じています。横須賀出身である大和晴彦（おわ はるひこ）選手と濱田琉瑠（はまだ るる）選手が、横須賀を背負ってカッコいいライディングと笑顔を見せてくれたら、今よりも横須賀にBMXが根付き、アーバンスポーツが一つの横須賀のアイテムとなって、色々な集客も生んでくれると思いますし、元気を届けることができると思います。市長、市民の方々に支えていただきながら、今後もジャパンカップを長く育てていただけたらと思います。

簡単ではありますが、9月27日から29日までのジャパンカップ横須賀を、私もしっかりと楽しみますので、皆様も楽しんでいただけたらと思います。

■質疑応答

記者

横須賀で3回目の開催となるということで、これまでと違った取り組みやパワーアップした魅力など重視していることはありますか。

(一社)全日本フリースタイルBMX連盟 出口理事長

去年から国際大会にグレードアップし、ワールドカップのワールドポイントを取ることができます。国内戦とはいえ、日本人選手であるジョージ（溝垣丈司選手）、カエデ（小澤楓選手）、ハルヒコ（大和晴彦選手）など色々な出場選手のレベルも上がり、ポイントを欲しがっている大会でもあります。ポイント合戦にも非常に重要な大会です。

また、今回は、開催期間中に「マイナビBMXアカデミー」というものも開催します。小学生向けの学校訪問をしてきましたが、見るだけではなく、実際に体験して、ぜひBMXライダーになってもらいたいと考えています。またスケートボードの体験も実施するので、他のアーバンスポーツも含め、見るだけではなく体験してもらおうということを重要視しています。

市長

出口理事長に全部お任せしています。エキサイティングな大会になるであろうと確信しています。

記者

名古屋などの他の地域でもジャパンカップを開催していると思いますが、横須賀ならではの感じるような強みや魅力はありますか。

(一社)全日本フリースタイルBMX連盟 出口理事長

肌感覚になりますが、横須賀は他の地域と空気が違うと感じています。BMXが合う街、ロケーションが抜群に素晴らしいです。うみかぜ公園という場所を選んでいるのは、うみかぜ公園がBMXやスケートボードなどのアーバンスポーツにとっての聖地だからです。この場所で大会を開かせていただくことも名誉でありますし、自慢できることだと思っています。

横須賀という名前の響きもカッコいいでしょう。それだけでも私はプラスだと思っています。横須賀という街がBMXに凄く適しているとずっと感じていて、いつか大会をやりたい街だと昔から思っていました。そのような中で、開催を続けられているということはとてもありがたいと思っています。

記者

聖地とはどういったニュアンスでしょうか。

(一社)全日本フリースタイルBMX連盟 出口理事長

私もライダーだった時に、うみかぜ公園にフラッとよく来ていました。ここには人が集まるのです。ジャンプ台、ダートジャンプなどがあり、ここに来れば、何でもできる場所でした。スケートボーダーもたくさんいて、みんな仲良くて、有名ライダーも移住してきています。気候も良く、海の際だし、自転車に乗って一服してビールを飲みたいという思いがあります。海のへりでBMXに乗って、アメリカの西海岸風ではないでしょうか。そういった親和性があるので、凄く大好きな街です。

記者

今回の注目選手はどなたでしょうか。

(一社)全日本フリースタイルBMX連盟 出口理事長

パリオリンピックに出場した中村輪夢選手がエントリーしています。ケガなどがなければ出場すると思いますので、当然、注目の選手です。また、中村選手のライディングに追い付くような選手も出てきています。

若手だと、昨年度2位の溝垣丈司（みぞがき じょうじ）選手。中村選手と一緒にオリンピックの予選会に出場していました。レベルが凄く上がっていて、トップ3に入ってくるのではないかと思います。

また、ワールドランキング2位につけている17歳の小澤楓（おざわ かえで）選手。彼は、オリンピックのリザーブでもあったので、経験値を凄く積んできていると思います。小澤選手はオリンピックで走ることができなかったのですが、気合を入れて練習して、今回の大会に臨んでくると思います。

この3人は、トップ争いに入ってくると思います。

地元横須賀出身の大和晴彦（おわ はるひこ）選手は12種類のハンマートリックを持っていて、全てが決まればトップに入る実力を持っています。ただ、どこかでミスが出ることがあるので、そのミスがなければトップ3に入れるのかなと思っています。

さらに、エリートの男子選手では、今年、育成からエリートに上がってきた若い選手が何人かいます。中でも松本翔海（まつもと しょうあ）選手は、エリート選手を脅かす存在です。緊張して上手く乗れないこともありますが、慣れてくると凄い結果が期待できるルーキーです。

エリートの女子選手では、今回のオリンピックは、年齢制限で出場できませんでしたが、小澤美晴（おざわ みはる）という選手がいます。今、オリンピックに出たら優勝できるような実力です。過去にジャパンカップで優勝した経験があり、先日開催されたモンペリエワールドカップでは準優勝しています。このまま横須賀でも凄い成績を残すと思いますので、注目しています。

そのほかにも13～15歳は、エリートと変わらないライディングをしている選手も多くいますので、見るだけでも楽しいと思います。

記者

アーバンスポーツを横須賀市で推進されていますが、県内でも各地でスケートボードなどのアーバンスポーツを推進していると思います。最近では藤沢市にスケートボードの施設ができました。各市で盛り上がることは良いことだと思いますが、横須賀市ならではの取り組みはありますか。

市長

私は市議会議員の時から、プレイハウスコンプレックス、街はどこでも小劇場と言っていて、アーバンスポーツあり、音楽ありと、どんなものでも街中で繰り広げられることが横須賀の街であると何十年も前から言い続けています。他の地域と違って横須賀市は本家本元です。

私が若い頃から、横須賀はそのような街でした。それを復活させたいという想いがあって、議員時代から取り組んでいて、その一つがアーバンスポーツであるにご理解いただければと思います。

BMXに関しては、出口理事長の人間性と想いと熱さに打たれて、共感を得て、ぜひジャパンカップを横須賀で開催したいという話になりました。先ほどお褒めの言葉もいただきましたが、まさに横須賀と親和性があると思います。色々なアーバンスポーツがある中でも、とりわけBMXだけはどこの地域にも負ないですし、あえて言うのであれば、アーバンスポーツの中でもBMXのまちにしていきたいと考えています。

他都市と比べて横須賀がどうであるか、ということは全く考えていません。横須賀は横須賀ブランドで生きています。そのうちの一つがBMXであるにご理解いただければと思います。

以前、とある人が、「いい感じで田舎、いい感じで都会」と言っていました。まさに横須賀はそういうところなんです。その延長線上に、いまのBMXがあると思っています。

記者

冒頭にデジタル技術や音楽との融合、メタバースを使った体験というお話がありましたが、いつ頃どのような形でやるといった具体的なものはありますか。

市長

まだ具体的なものはありません。

メタバースも含め、AIや音楽など様々なものが融合して、横須賀に新しい世界を作りたいと思っていることは事実です。それが理想的な社会になれば良いと思っています。その中でBMXは様々なことにチャレンジできるものだと思います。具体的に目指すものは、まだ見えていませんが、色々なものを融合させていくことで様々な化学反応が起きていくだろうと思います。

記者

今回のジャパンカップで、そのようなメタバース、A I、音楽に関連するイベントはありますか。

文化スポーツ観光部長

あえて、アイデアベースで申し上げますと、例えばメタバースでしたら、メタバース内でのジャパンカップのパブリックビューイングやトリック体験などを将来的にはやっていきたいと考えています。また、音楽との融合に関しては、ロックなどいろいろなジャンルがありますが、次回以降の大会でうまく融合できるように考えていきたいと思っています。

市長

個人的には、ロックをやりたい。必ずやりたいと考えています。横須賀はロックの街ですので、ロックとの融合をしていきたいと思っています。

記者

メタバースや音楽などを融合させたものが垣間見えるということは、今回の大会ではないということでしょうか。

文化スポーツ観光部長

それは次回以降に考えたいと思っています。

■案件以外の質疑応答

記者

今日、自民党の総裁選が告示されました。地元選出の国会議員である小泉進次郎議員が初挑戦します。市長は小泉議員と連携して国に働きかけをするなど、地元のことも含めて、色々なことを進めていると思いますが、小泉議員の出馬についての所感や期待、あるいはこういったことを訴えかけてほしいなどありますか。

市長

ぜひ頑張ってもらいたいと思います。

小泉議員とは連携して、横須賀の発展のために力をお借りして様々なことをやってきました。目指す横須賀市像、あるいは社会像は一致していると感じていて、非常によい関係にあります。そのまま国政レベルでも、社会を変える、日本を変えるために頑張ってもらいたいと思います。期待するところは、私は、選択肢がある社会、できるだけ規制をなくして自由度のある社会ということもいつも申し上げています。地域主権主義者として私が話していることを、国においてもやっていただきたいと思っています。おそらく、小泉議員にも、その感覚があると思います。ぜひ頑張ってもらって、新しい時代の流れを作っていただきたいと思っています。

記者

新しい感覚という中で、一方では経験不足ではないか、若すぎるのではないかといった声があります。小泉議員ということではなく、一国の首相、トップの資質として、横須賀市のトップである市長は、どのようなことが求められるとお考えでしょうか。

市長

私は、時代はだいぶ変わったと思っています。かつては、カリスマ的で、俺についてこいという全

てができるような人が求められていたと思います。しかし、積み上げてきた能力、蓄積した経験による統治という時代はとっくに終わっていると私は思っています。小泉議員がおっしゃっていたように、チームワークを大事にして、ワンチームでやっていくという時代になってきているのではないかと思います。

SNSを通じて、様々な毀誉褒貶がある社会の中で、「そちらがこう考えているなら、こちらはこう考える」というテーゼ、アンチテーゼの時代ではなく、「こういうものをやりたい」ということに特化したチームで取り組む時代になったのではないかと思います。

ある意味、経験が身にならないような時代、むしろ経験があるが故に上手くいかなくなる時代に入ったのではないかと個人的に思っています。非常に感性が豊かで、器量があり、視野も広い人間がトップになるべきというのがこれからの時代の要請だと考えており、年齢は関係ないと思います。

また、私は新自由クラブの田川誠一先生の弟子でした。もう新自由クラブは無くなってしまいましたが、新自由クラブは政治倫理の確立を掲げていて、それは私の中に、いつもありました。

政治家には特権と言われるものがあります。特権を持つ以上、一般の市民より、道徳律は高くなければならない。常に自分を律していくことは、政治家として当然だということを言わない社会自体がおかしいと思っています。その意味で、小泉議員は清廉であるし、そのあたりのことを良く理解していると思います。元新自由クラブとして、田川誠一先生の弟子として、政治倫理を確立していく上で、あの若さは非常に大切なのではないかと思います。

記者

先ほど市長は、目指す社会像が一致しているというお話をされていましたが、小泉議員の記者会見はご覧になりましたでしょうか。

市長

全てではありませんが、拝見しました。

記者

夫婦別姓を認める発言や社会を変えたいというお話がありました。その発言、政策に市長が賛同するといったようなものはありますか。

市長

政策というよりも、ものごとを前に進める進め方だと思います。今までは、55年体制で、合議制、民主主義の名の下に、問題を先送りにして、きちっとしたものが全く前に進まなかった。私は、必ず、正・反という形になる55年体制に批判を持っている人間です。それを引きずっている社会には、そろそろけじめをつけるべきだと思います。こうありたい、これを進めていくというように形で、小泉議員には、夫婦別姓も含めて期待したいと思います。

記者

プライベートなことになりますが、出馬を表明されてから、小泉議員と何か連絡は取られましたか。

市長

出馬を決められた際にご連絡をいただきました。

頑張るように。横須賀は私に任せて、できる限り後方支援をする、というお話をしました。

記者

直接、お会いになったのでしょうか。

市長

電話です。

記者

電話があったのはいつ頃ですか。

市長

ちょっと忘れてしまいましたが、9月に入ってからです。

記者

7月から横須賀市で開始した同性カップルの住民票の続柄表記の変更について、近隣の葉山町などでも9月から始まりました。県内では横須賀を発端に広がりを見せていると思います。これについて市長のご感想などがあれば教えてください。

市長

どんどん広がって行って、どこの自治体でも同じようになっていけばありがたいと思います。人権の問題は、横須賀市だけではなく、全国規模で広がって行って、各市町村で同じような対応をしてもらわなければ困ると思っています。その先駆けとなったことは良かったと思います。

記者

年越しイベントが廃止になるということで、それに対して市で何か続けられることがあったりしないでしょうか。

市長

その話は残念だなと思いました。何か横須賀市でコミットできることはないかと考えました。まだ職員には話していませんが、今年にできるかは別として、自分なりに何かできないかと考えています。残念でならないです。やはり年越しイベントはやるべきだと思います。

記者

自衛隊と米海軍を含めてできる場所というのは、他にないと思います。

市長

おっしゃるとおりです。ヴェルニー公園を使ってあのようなことができるのは、日本全国でも横須賀しかないと思います。今までは民間事業者が主導で開催してきたので、行政はあまりコミットしてこなかったのですが、中止になるという話を聞いて、何かできないかなと考えているところです。

記者

先日、横浜地方裁判所横須賀支部で逗子であった米兵による傷害事件について、求刑の言い渡しがありました。判決は今月末とのこと。今年の後半にはジョージワシントンが再配備されます。全国で米兵による事件への関心が高まっている中で、一時的に米軍人の人口が増えると思いますが、このことについての市長の所感を教えてください。

市長

逗子の問題は遺憾に思うとしか言いようがありません。米軍に特化した何かというものではありませんし、ペンタゴンを往訪した際に、そういったことがあると困る、と厳に話をしてきました。ただ米軍だけではなく、一般的にもそういった事件はあります。厳に申し入れをしてきたというこ

ともあり、それほどの心配はしていません。